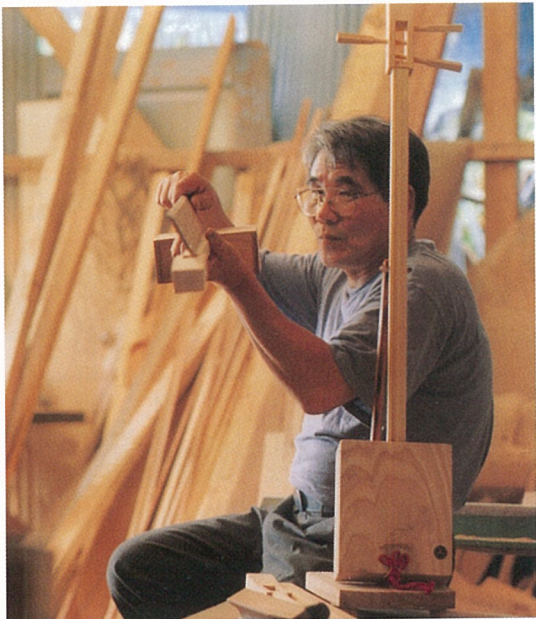


## ●信仰結び付く演奏法

諸県地方の「かくれ念仏」の遺跡の中で、人家の近くに記念碑が立ち、三百年も続いた一向宗弾圧史の跡が明確に目の当たりにできるのは山之口町富吉に残る「田島かくれ念仏洞」をおいてない。

慶長二（一五九七）年二月、薩摩領主・島津義弘は一向宗を禁止、過酷な念仏弾圧が始まった。しかし、人々の強い信仰心は激しい弾圧に屈せず、洞くつや山林、家の床下に隠れて信仰の灯をともし、守り続けた。その念仏洞の原形を残しているのが、入り口の高さ百十<sup>セツ</sup>、幅七十<sup>セツ</sup>、洞くつ内の高さ百二十六<sup>セツ</sup>、直径二百二十<sup>セツ</sup>の田島かくれ念仏洞である。

伝道僧は藩外の清武から役人の目を逃れ、山之口と三股町境の東岳（八九八<sup>セツ</sup>）を越えてきた同町・安楽寺の初代・佐々木深道師。その布教は命懸けだった。



ごったん作りの名工・黒木俊美さん。  
奏でる響きは人の心を打つ

山之口町内の田原、川内、木上、上森地区にも念仏洞があったが、今その跡はない。人々は「がま」に隠れ、悲惨な拷問に遭っても信仰を捨てなかった。それは「念仏」による安らぎと、非暴力による差別のない世への強い連帯感であったのであろう。

しかし、殉教の道に徹した民と権力者との抗争対決の月日が三百年余の長期間であったということは、封建制度の残酷物語として語られるにはあまりにも切なく悲しい。一八七〇（明治三）年八月、山之口町富吉の上田伝兵衛は、かくれ念仏の指導者であることが発覚、極刑に処された。念仏を唱え、従容として刑死したという。

「田島かくれ念仏洞」と深いかわりがあるのが民俗楽器「ごったん」。県指定伝統的工芸品で、念仏を唱える伴奏楽器として用いられ、「ごったん

念仏唄」を残している。ごったん作りの名工・黒木俊美さん（三股町在住）と都城市の故・鳥集忠男さんのうたい奏でる響きは多くの人の心にしみた。

ごったんは板張りである。生きものを殺すことは、信仰心に反することから、素朴でバチを使わず、指で音を出すのも、信仰と結びつく。現在奏者として同町花木の小屋和子さん（<sup>ネト</sup>）がいる。週一回、向原、正近公民館で主婦らを指導。以前は富吉、山之口小学校でも教えたが、今は途絶えている。若い人にしっかりと伝えていくこと。それが小屋さんの願いである。

ごったんは置物としても、土産物としても重宝され、喜ばれている。南九州の人々の心の楽器でもある。

竹原由紀子